



第193回くらしの植物苑観察会 2015年4月25日(土)

-日本の桜草栽培史-

山原 茂(浪華さくらそう会 会長)

日本桜草栽培史

第一期 京都からの流れ

[室町時代中期から栽培が始まる]

『大乘院寺社雑事記』 文明十年三月(1478)の項の末尾に

「二月 同 花桜 信乃桜 岩桜 庭桜 桜草 全躰」とある。

尋尊(一条兼良の五男)による筆記

[花材・茶花として使われる]

[描かれた桜草]

狩野光信の屏風・襖絵(三井寺)

俵屋宗達、尾形光琳、中村芳中、酒井抱一…琳派が継承

[京都から江戸へ]

上方の先進文化の一つとして園芸が伝わる…江戸城内お花畑

[園芸書への登載]

水野元勝『花壇綱目』(延宝九年 1681)

貝原益軒『花譜』(元禄七年 1694) 『大和本草』(宝永六年 1709)

中村惕斎『頭書増補訓蒙図彙』(元禄八年 1695)

伊藤伊兵衛(三代)『花壇地錦抄』(元禄八年 1695)

伊藤伊兵衛(四代)『草花絵前集』(元禄十二年 1699)

『増補地錦抄』(宝永七年 1710)

『広益地錦抄』(享保四年 1719)

『地錦抄附録』(享保十八年 1733) …10種の桜草

第二期 武蔵国荒川からの流れ

[荒川中流域での自然群落の出現]

葦の利用…野焼による葦の再生、裸地の出現が桜草の自生を可能に

柳沢信鴻『宴遊日記』(安永十年三月七日 1781)

「土堤の下は野新田に続きたる曠野、桜草所々に開き～」 「～曠野にて桜草を掘」

[変異株の収集と栽培]

桜草は変異に富む草花

喜多村節信『嬉遊笑覧』…「～形の珍らしきがはやり～数（かず）百種に及ぶ」と

渋江長伯『寛政年中腊葉』…「押花集」で、すでに切弁、鑷弁あり

個々人による栽培

[庶民と桜草]

荒川自生地への桜草狩り。桜草の鉢植え（四文）の振売り

二代目富本豊前太夫が桜草紋付で出語り

[連の結成]

仲間による交流と新花の競い合い…栽培者約 100 名

良い品種生まれず…連の衰退

『桜草作伝法』が著される（天保時代）

[染植重による園芸種の革新]

『桜草名寄控』（1860）に載る銘品…一天四海、紫鑷、唐縮緬、玉光梅、東鑑

白鷺、満月、江天鳴鶴、楊貴妃など

銘品による桜草界の再生…新花の広がり 江戸から東海、上方へ

名古屋では『桜草見立相撲』の版行（430 品種）

[栽培の衰退]

幕末維新による政治社会変動により栽培家の没落（禄を失った武家）

しかし植木屋染植重は健在であった。

[明治の復活]

柴山正富（二番連の一員）による皇居展覧、自宅庭での公開展示

四代目伊藤重兵衛（常春園）による苗の提供、銘鑑の発行

栽培は一部の上流階層に限られる

[桜草団体の結成]

日本桜草会（大正七年）発足…日比谷公園での展示（数百鉢）

広く園芸品種の桜草が認知されるきっかけに

浪華さくらそう会（昭和 11 年）発足

[戦中戦後の衰微]

戦時体制一色から敗戦、食糧難に（花より団子）

しかし身を削っても守られた桜草苗、京都の桜草は無傷で残る

[戦後の復活]

敗戦→民主社会…誰もが栽培できる社会環境に

さくらそう会（昭和 27 年）発足、日比谷公園での展示

浪華さくらそう会（昭和 30 年）再出発

栽培者が一気に増える



[桜草界の隆盛]

桜草関係書の出版…加藤亮太郎『日本桜草』、鈴木冬三『作業十二ヶ月日本サクラソウ』
鳥居恒夫『さくらそう』など

各地方の桜草会の結成・桜草展示の広がり、TV 放映

新花の簇生…中村長次郎氏によるジベレリン浸漬法の紹介

浪華さくらそう会による HP の開設

八重種の出現…加茂花菖蒲園一江豊一氏改良

4 倍体種の育成…宮崎三千男氏

MEMO

.....

次回予告 第194回くらしの植物苑観察会 2015年5月23日(土)
「酒銘にみる植物」 青木 隆浩 (当館民俗研究系 准教授)
13:30~15:30 (予定) 苑内休憩所集合 申込不要